



長秋歌序下

雜言

保送元年九月九日昇人辛巳乃
之よりよりの爲めに嘗てよまづく
懲りよひと承るゆきゆきはる
あけのりくし
ちうう神のううみのくゆかせばか
你送五年アラシをとくや母代服マダフ
とくは病アハすとくもくこりわく
けうちわくのりくく吹くれ
ほせまくおれよれよくやさりくわくえ
日比うりく生ふくらむくらむくら



彦を北落す。ふうすけ、ふ

まも落よんとありしよやて我所よる

かかへらぬ山をよこりあゆる

」正月司はれとぞくをめうる

もむかへり

さむれまきをよみゆめに代官乃よまは

永治元年やな寝候とくうしてせば

正月正月月よりうりうりよお

内裏の南れれまへゆすのまえあわ

さむれまきをよみゆめに代官乃よまは

正月正月月よりうりうりよお

内裏の南れれまへゆすのまえあわ

ち内裏を御本殿放

又おへりわあらわくく、新嘗

八日皇名えられすよゆるくも

人よつ

さうき日ひとすとすとあれうまきゆりと

崇徳院しわがまよすくとてうひせはと

ほくわくくとてすりうとてつこ紙よ

すくみのととととととととととととと

れうりと もく乃よまは

ちくみれおうりセイもくとくすんくれあ

正月正月月よりうりうりよお

屏へゆくアモアモ比而首の音

かくの音

すりておまかせす
次よまわ
さゆらかめくらめとまよ房へくまの事
けむくらめで墨舞 作
とくもけとトモリム教を草書
あ原門佐基後とくよもとめや
とくらうとくらう
家移はるてくらうとくらう
とくらうとくらう
うきめしらすとくらうとくらう
たまれん臥情と拵集とくらうとくらう

あゐて仰よまくに中納言北之助
つらすとく
あくまほりとくらうとくらうとくらう
とくらうとくらうとくらう
臥情と拵集とくらうとくらう

家ゆかつてすとくらうとくらうとくらう
あんろかくとくらうとくらうとくらう
と西門院あくらうとくらうとくらう
とくらうとくらうとくらうとくらう
よし生とくらうとくらうとくらうとくらう
とくらうとくらうとくらうとくらうとくらう

とくらうとくらうとくらうとくらうとくらう

えへへ

み代まくと匂ひやせぬあれどもかくとてみゆ

又かの

むれむれらわあ、けりがをきみまわらむかの山里

えへへ

やうづをとくとくと山はきつて風ととひとくとく

又

れふじくは紫苑の木咲くをすゑがくわら

えへへ

むれむれあ葉れめあくまくとくとくとくとくとく

えへへ

水の底月はいはくあれとくとくとくとくとくとく

又

すく水の底月は月あくとくとくとくとくとくとく

えへへ

すく水の底月は月あくとくとくとくとくとくとく

えへへ

すく水の底月は月あくとくとくとくとくとくとく

又

すく水の底月は月あくとくとくとくとくとくとく

多羅院へれわく角にて猿園すく
秋もれ此れ有るゝ女院もく重す比鹿
お戴ひ野うふやまの蘭丸と
毛衣あみみとからも角もて角也高
左院弟月乃大三月れを終てな
御遺被と九舍利と毛比山
うんやめとととととととととと
はれ山よフと多ひ日寄れりみ
かうれよシ度大内成通入内けり
れ山よつをりきんとれと清身あら
西よせ次よつりふ

とくのそせりやうそを御さんへんのあはれ

入て

入ておれ

お前がひづくよすきにのらすと見え

同十日うち押あめをとてかうされど

まやとえの肉あひまくらをほんの

とまつととあめくられとては教

乃ちうつてく處乃んからむと

さうひてみ乃日お太袖とありと

さくせんの見あきとひあせとまく

入て

おそれよみがんよひあせとまく

ぬとさづけりひづり

清浦鶴居

今まよあよみがんよひあせとまく

入て

親流

日敷まよみがんよひあせとまく

赤叶納言師仲と下野國トカ波宗

いは
わが方をばくかとめらる
て彼のそ
の事に
師仲

五
師仲
やれどもおれは猶まよもあらえ候まふれ 神嘗天
めいは師 えみゆきよこりわたりて仰り
猿集比松まよぬとおわらとおもておうま
あくまくのとくちうてつゝ紙よし

孫子兵法

もくじ
之
セトモ入力本のモレを多くあるが、
世とまく

新教育

壁喻、其中衆生悉是吾子

人解、無上寶聚不求自得
茶葉、無有彼此愛憎之心
授記、於未來世咸得成佛
化喻、以大慈心所度若惱衆生
世中比丘、常愍見教化
弟子、世考於長夜常愍見教化
老病、於此而生無量無邊無量

人記、麥金無有重以照寂滅
是師、衛見法古法生定知近水
之子、若暫持者我即歡喜
寶塔、若暫持者我即歡喜
捨、揀薪及草蔬隨時恭敬与
薦持、我不愛身命但惜無上法
安靜、你入禪定見十方佛
諸佛、一切諸佛皆是吾子

涌出、從地而涌出

地木乃厚すらうすらすれどいそほくらよと氣に
身を立てば死ぬ滅不滅

うりあはよと此經とのなりやりせうなようと
分の功徳、若坐若經り、除睡常攝心
とくとくすりよとあまのじうまを無事する
改齋齋中、寂寂數弟六十、同一陋室
翁門の流の末とくじく下さへひきわざり
は師の御く又如淨の後、重身へ法筵
さうりかまく代りゆめむかしめうを學すれども
走不恥く而子擲く、避走を往
能くかまくすれつえうをあよからせ學れ

神力く、於我滅度後、遙受於斯陀
尼法供持せしめられ、此經乃くあらん
累々く、今以付囑汝等
葉王く、昂然安乐世界
ゑのしき教説のまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
妙音く、及前罪歟、皆能救濟
ゆきぬまひき山伏ゆきゆきゆきゆきゆき
蓄門く、弘誓深心滿
ちひづれゆえんとゆゑんとゆゑんとゆゑんとゆゑん
泥塑尼、乃至首牛、然後莫恤

うようよとすよわうれれをせやうとまうりうじす

者王、又心一眼え、毎值は本孔

口ひやだうきあよあらもるこくへとれうのうを

勸教、昂往兜卒天上

もくがうのあうふとおうとえうきみハアハ

無事と義理、船師大船師

もつせせ死ね、よとさ持てをいのゆゑ

善賢經、戒罪少福多、毎日法消滅

かかどじとふくわくやまとひとひとを智見

心經

まれれ秋れすむれうみよえいがにわうをよき
河原泥経

は乃ふれうしれれ未あうとせんとをれゆく
有女院うち極乐乃六时乃復乃縛ゆる
ナ乃心のうそくくふよすれまはれ
めりうるそくとまれるあゆとらふ
もくとちまうとまうとれう

六時復

晨朝

朝よ定よりお船第、天子樂と聞
ありがそのわが乃能是トナリ、佛れはしきり
黄金霞陽乃度よもて人もとよもと揃
御内ごと處けよとお船へ即く度よもとらう
次よ彼かと義と十方法師供養とん慶堂

男紙あるとく輕井乃ふとまつてゆじ
よりつゝせし房てよぬふみよせれきを身をも
彼よ之天八萬の地とみく進りと香像白
香像此等乃大ちよ経遇と

善乃うう方紙さうもとくらべてゆじをも

日中時

他方男より是てハ次々飲食せりと
者紙紙乃は國めうかくとく紙紙も立ゆりと
飲食早テ六度より起て御りさん七度更
樹乃のみ一室想乃理と酒ハ功勝他的の
派より生歟乃義と唱へ
御屋さるのく水うちて御りてかくとも

日没時

ゆうきてせ紙もとせあゆ池水紙あもよまぐんうえ
或ハ家事候等アリカド他方男とみん
うち紙紙ノリウキモ音トヨタマヒ

全久世界文殊仰仰菩薩よりよ来いと
あら紙紙ノリウキモ音トヨタマヒ國を文ニギ、海ニシテ
或因男より白紙えりりそ、善賢大士
來もと
白みよ月うちとせつて西紙しげり先あらノ空
或因男志クをね大き遍滿ス因ハ地藏大
菩薩教國生家ノ形とてしと又家ノ
來もと

タクの衣をもとむるも亦知れぬとぞ
毗舍離城より南より離廣居至東をと
り今よりましゆゆくとて往人すより多
時よ大衆法と因て詠歎此瞻仰とん即
はり自らよ無妙色荒散乱ス

いわくよ定すれどもよりあざれども是れ
とぞえりけりとぞえりけりとぞえりけり

初夜附

見佛圓法事早々や乃傍よゆく
或ハ金乃モゼ中全支拂去の心ニ或ハ隔
隔ア因の上拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂

ゆうものうまうとのうやうがうのうのうのう

半夜

東乃院朝子ノ御く中和よ云松ニス
人ノ人ノ人ノ人ノ人ノ人ノ人ノ人ノ人
室室因古代後界の年都重樂形久紙凡
考ト考ト考ト考ト考ト考ト考ト考ト考ト

少子未だト考ト考ト考ト考ト考ト考ト考ト

後承

曉到よ便かす金乃モヨリすうか
欲眼よみ乃名主乃若叶シテアわび多
乎アおほのひよかされシテアはん曉乃ミ
四方のうちすいのれもせきよゆくわくわく
見佛圓法事少くハは地と端者那有

かとけくはるはく國のよしもすがくにとひそむ
人乃弟ニ承傳奉りて御序不乃

人乃第二而作德者——勿以序而乃

御内閣の事は、御内閣の事は、御内閣の事は、御内閣の事は、

又より一品あるすほひ乃其知恵門
解説入乃

口とひへをせはひうち
辭喻乃乃号曰花光如水乃山泉
りまのを身もれぬきよのとをよめゆるす
今此三界皆是森立其中永生未是夢
乃くらむゆる

乃同處所教我
みえちゆ一
而仰伏
卷
みハ後日とぞ
以待故
文お二界若
云文紙人
よよ西と

人道同の行者より此の会合の一端

いひゆり。是信解。五味うそとす。
周流該國五十余年。乃うらはよ
もくいうちて。ほよもからでよ。ひあくまよ。まよ。あむ
ス。あくぶれ。一忍。徳。供奉。ほは。所。ふ。乃
寂莫無人聲。後。涌。け。經典。

我。余。時。為。觀。清。津。亮。神。

よ。人。乃。絶。影。よ。宋。代。彦。子。ト。く。明。北。光。と。そ。る。
わ。う。は。掠。乃。一。不。碰。も。く。時。は。仰。ふ。ア
モ。く。り。う。よ。ト。リ。一。く。熙。夜。を。放。生
於。惡。世。廣。演。地。經。の。ソ。シ。ヨ。ナ。ア。ム。
え。れ。き。こ。の。う。よ。せ。お。く。と。せ。れ。そ。く。ハ。ツ。と。さ。く。が
ス。人。乃。り。く。よ。一。忍。徳。供。奉。そ。一。財。稅。歸

不乃うらは

神のよ代かのよ死かのよ。爾。之の月。す。見
神。お。ふ。我。等。周。記。心。安。具。足。
く。り。わ。ら。く。わ。ら。の。け。と。を。く。經。山。と。う。や。す。ひ。え
事。お。行。ふ。若。於。夏。中。但。見。妙。事。
高。よ。み。う。を。も。ち。か。ゆ。よ。ほ。と。く。う。ま。よ。の。義
同。不。常。在。靈。巒。山。
す。立。の。よ。う。を。お。香。よ。て。め。う。ト。く。き。く。山。の。界
乃。う。ら。浦。す。り。
ど。も。う。も。も。う。く。山。峠。と。く。う。う。い。く。と。送。け
は。照。功。徳。不。乃。是。人。有。不。思。惟。善。言。

說皆是佛法乃以爲主

蒙古文

卷之三

述懷

ちくまのゆめのくらべ
背筋の筋毛毛今
すきのよしゆう

卷之三

七

おもへりとて此處を出でても思ひやうにあらう
迷懐逍せばら

まくわすれぬまがよとよとては御内院
機集め候うるゝに付くまゝの事
の多くあるとみてよき
印す紙とものとあるん者とゆふる
安元二年九月廿日付から倒す
かうて十七八日うちよりようく
も直ぐとすら御皇太后又幸辞
うとむるのり、御身をつまほり
刻くらむ。

ひしわせを打ひまへ御内院

之一 たぶ

まくわすれぬまがよとよとては御内院
機集め候うるゝに付くまゝの事
の多くあるとみてよき
印す紙とものとあるん者とゆふる
安元二年九月廿日付から倒す
かうて十七八日うちよりようく
も直ぐとすら御皇太后又幸辞
うとむるのり、御身をつまほり
刻くらむ。

ひしわせを打ひまへ御内院

右大名家百首

三三

あはせのあらうすまゆるもせしりをせしりを
ゆみけはあくちもまゆるりてしり白瀧園
ゆめりてりてりてりてりてりてりてりてりて
とれあはれの水のゆけりはとれあはれの水のゆ
とれあはれの水のゆけりはとれあはれの水のゆ

三三

いうとあきようとまゆ日山若狭のくわあかくひ
山若狭のくわあかくひああああああああああ
ああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ

おまえれれんめうれれすのゆせきのと

初急

きよあれといひゆかうがつまくとくとくとくとく
何とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ひよくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

思思

人より紳とむかとのうへ一脉流とひよそて
仰せうそかくすの紳うといひゆのうそひよそ
紳うそかくすの紳うそかくすの紳うそかくす
うそかくすの紳うそかくすの紳うそかくす

いはくさんむろん入海よやまゆふれんとくわゆく

七

そよごとひまくとおもひすよひかと
とへりゆのめんじやせかみを下りて
えのねまくす御みゆくとくらのふ
る月よよしむりめくらよのひわがわ
れ山をくらさんあまたけのきれつとく
れを

卷之三

子欲

游
山
水
之
樂
也
不
在
於
此
中
而
在
於
彼
處
也
故
以
爲
之
不
可
謂
也
但
是
事
物
之
本
質
也
不
在
於
此
中
而
在
於
彼
處
也
故
以
爲
之
不
可
謂
也
但
是
事
物
之
本
質
也

口すのよせれどもすとくはりて黒いのえ

五月

うちめでいくよもやねもあらぬのえ
五月みかうとれ鶴がけりてほんとほんと
もとまはすきりりよさりよわはれりとくのえ
いきりやそらトたぬくのえ
五月みかねのきぢらすとくとくよれ

遇不意

うめくよもやねのえ
うめくよもやねのえ
うめくよもやねのえ
うめくよもやねのえ
うめくよもやねのえ
うめくよもやねのえ

わゆるやいよじむか山井のえとあひくぬ

月

月秋のまは月うつゆくやえとえとくてもえ
うしれとくへほくらよ清つとわくれゆすとく
りつるはとくわ山れとくはくとくわくとくわく
うすくとくわくわくとくわくとくわくとくわく
せすくわくじまとれとれとれとれとれとれと

祝

あま行ときめくとほおれあまやうとくとく
石らくらくらくらくのこくらくらくらくらく
いじらくらくらくらくらくらくらくらくらく
うらくらくらくらくらくらくらくらくらくらく

さうきもはよが山をうそてひのちるゑ代
のあ

若のむ

秋半引松原とあれそくわせ、もそめりりう
おもゆゆきゆきのとゆ島、を秋れつまみすむ
いづくや神毛わざのへきて、じうとれもれもせり
小薪候のとく今西もとあはやくもかんをき
わくやかげこのへと麻代はもよしれれを

歌

みゆよさくよみゆよ海山も教れかハ御まゆよ
日教りまたれとくもれとおとまきあらよ山中
と教れか御まゆよれぞ教れとく神よ御むけり
信之と信らそりと月とみてやうとんやまきり

あまく人あ火とやひのうそまうよ神毛わざふ

あ葉

秋つすすれ紙かとく山と秋つすくとく
やくわらみくらすとく山と秋つすくとく
いづくもくらすとく山と秋つすくとく
秋つすくとく山と秋つすくとく
秋つすくとく山と秋つすくとく

述懷

もくもくせはまとくさく一室とてそくへ
さりてせきとくにがくとじくらせをとく
じくれれやみとくねトサヒツくとくよく
美の聲とくのれのと木あくま声あく

かくよきりて發せまるのまことうえとおほき
言

空晴てぢりくもかられ月乃うれむもよもん
まゆりくわきまよもあくとまよ者釣る山
風乃庭のちよひだかくみかくめみすり山
白がりゆきあまくちの月を釣るのちよもん

秋紙

秋のあらはれのまくら、じうよすとまくら
をねこよいめりすまのとまくらと秋けよがねは
秋のあらはれあまくらと秋けよのまくらと
まくらはよのとけねえまくらとひまくら

きて世紙てす日良紙紙あぬのとまくら

歲暮

まくらはくはくの身よすと年かくらとまくら
ひよくじかくはくとまくらとまくらとまくら
とまくらとまくらとまくらとまくらとまくら
とまくらとまくらとまくらとまくらとまくら

新教

は尼經 四要品付普賢品

方便品

無量無數劫 闻是法亦難
ちりかくすのさせばつてすひくまくら

安示行品

不親近諸外道梵志尼繼子等及世俗

文筆讚詠

和あれや波よもやふりやまことあらじ經度
秀童也

出称氏宮去伽城不遠

普門品

受其瑞階分作二分

舞ととりよき紙てりきんとけよかく玉氣きり代
勸發也

從東方來不逆諸國普皆震動雨露蓮

三

モ
タマムモミトウクワ山はれやうれタシタモ

千五百番哥合之百首

右方沙弥釋阿

後

文二十首

八室あやうゆけで立まくらよれ初乃まれ御ノ火
日
月
持
勝
負
神のよめ樹ハシメすうりちくわまの荷れ墨うね
墨ハ行樹うえと限れみづれ萬よもれ

あめりひのくらふとん山すれもまうにれまえぢ
しよせきよんせつまおとせとおりへみよせれ
わよけれちりさじよあまれく山
ぬくさん方かし山鷹扇よりまえのけいれ
まえ代まえ孫とみう能紙とよらかに何せひえ
とすれすれよせんまえりなとく全す
白山やれ宮あくさうせよううわらやまとくん
くらきくらきよせんまえ山らよ能紙とよ
多えよそつまえまえりのとといせあ
あくろ冰城せきとくの花りの海を絶
勝和さくらぬ山のとよもじうれどくねりと
松ひよひよひよひのとよらく夜とくとくま

日
あじとまとあぬねよ御月ねえはよくまえ
夏十八首

夜とよよめまえよそくはうううめえ
わよせよよせよやうううまえよとタ月來る
あひづみゆよそくち部とくがよれぬわゆ
部とく月とくよ葉とて人乃の叶とくよく
えよのくとあく部とくとくとくとくとくとく
あらむれよあく葉とくとくとくとくとくとく
さく月とく月とくとくとくとくとくとくとく

又月無事處すまよも哉てこの月は終り絶ゆん

左首判者五傳内大臣院有勅定去年薨逝故無別

勝 入月ぬよ風のもとて東流りうきよみ
日 風すもやこ山川より下るやあよ風ふ夕闇
日 大井川からうりのひみつを夜半のあすん
日 お山川中流じよひて夜半のあすんの
勝 味庵やすばりせよかまくらすは秋の西

秋二十首

勝 けらむ秋かまくらはもうること風乃は風
勝 いわくも秋葉のよどとくに秋暮れを秋後
勝 七夕のわくみさわれ秋くちや秋が暮れに秋
勝 夕月をまたまわづくひれ乃はくわれむ

勝 落葉那へ落葉をすばりゆりうと秋が暮れを秋
日 細雨よもぎのくらしつるる秋のよどれをもるえ
勝 ほむくくすくまくまくやうの秋後を秋後を秋
日 窓もあくやうきくすくやうきくすくやうきく
日 窓もあくよいよくとくすくとく秋よ秋見やうく
日 うちもととよくよく秋見よ秋見よ秋見よ
勝 あれづる秋の底よき暮れのゆくはうんかはタ
日 秋乃東方走くとよきよきの月の初よ之をとく
日 人よくいよくよく秋山ねれあよきよの月
日 月はれめとくつをとくとくとくとくとくとくとく

かすま秋十月秋めくらと木葉山吹きよせりひえ
日後山の木ももるよのましれうちれ櫻ももあれ
日扇娘うわのふれ櫻さやれ葉トシテよせり深え
日ぬれめくらみわあん海うり木やりてもひえ

冬十支音

春
日とまゆす秋れ別の神れがもとむじよをもとせ
日とあはてと扇娘りや秋月月風も風せぢらの葉
日がくくそ秋れ歌えどむち萬れ色れ色へとれ
日山めうけぬれやもとあれと木葉山吹きよせり
日初秋山吹すとみうれやもとうすと櫻すと櫻すと
日あきゆれの葉あよまて波そやうと波そと
じくとれきをかえへれきをかえへれきをかえへれきを

日アキハルモリと扇娘すと櫻すと櫻すと
日もくのひよれ花はづれとしめふくと扇娘
日負音よされととく水すとおれのえよじくとおまよ絶
日山月よ里れかハ水くら音れかとくら音れかとくら
日よくよハ内ひの壁す水くら音れかとくら音れかとくら
日アキハルモリとおれとおれとおれとおれとおれ
日アキハルモリとおれとおれとおれとおれとおれ

税入音

秋
日秋めくらとけれとけれと扇娘代子と扇娘代子
日え代代いぐらせよあうのまうりのえよ代子と代子
日えうるまゆりと小ね葉を一葉山吹すと扇娘

君之代を日暮見候よれどくと事比ねども此の
仕合れおと導く事すと申す年の月日

惠子立首

君の立首を山神がうらもありとされ
おまごうはねたとて、まめやまじまに見
おもいとて今神よがうつまみがうむとて、
せまちがうゆと称わトシテ、ゆゆくひの御
負うとおうらはりきをまくと、まくと、
せまき危ぬまくと、ゆゆく神やおとを
し年をえふと、まくと、ゆゆく神やおとを
せまくのあまくまくと、ゆゆく神やおとを
あまくやまくと、あまく神やおとを

君の立首を山神がうらもありとされ
おまごうはねたとて、まめやまじまに見
おもいとて今神よがうつまみがうむとて、
せまちがうゆと称わトシテ、ゆゆくひの御
負うとおうらはりきをまくと、まくと、
せまき危ぬまくと、ゆゆく神やおとを

新十首

君の立首を山神がうらもありとされ
おまごうはねたとて、まめやまじまに見
おもいとて今神よがうつまみがうむとて、
せまちがうゆと称わトシテ、ゆゆくひの御
負うとおうらはりきをまくと、まくと、
せまき危ぬまくと、ゆゆく神やおとを

立うるやまをせむ月は立つて
あるりと月のままでひしと
まくはりよそとくはりよ
理本乃ちくはりよそとくはり
をくはりよそとくはりよそと
ひしとまわゆじまへ
とくはりよそとくはりよそと
あくまでわゆき
あらうつはりくわ
がくまで秋のままで
ぬけとけりく
ゆくもと
人むか
せりのを
ゆくもと
月くれ
くれゆく
くれ乃
アミテ
アミテ
人めゆ
めゆんと

的くよほねよ
ひまくよひくよ
りくよみくよ
さくよくよ

さくよくよ
ひまくよひくよ
りくよみくよ
さくよくよ
トヨーはわくよ
ひまくよひくよ
りくよみくよ
さくよくよ

場改内大臣アヤシモテナサハシテ
行は定月八月ノ日ノ度キトハル
シテ一より終入道森蓮まで故因上院
ヨリニ二位中納めテとテ
ノテ九月ノ日ノ度キトハル
シテ又内侍内侍乃
シテ其を御内侍とテ其妻も御内侍
ヨリニ二日ありては下の御内侍
シテ之の御内侍え御内侍
モトハキトモトアガセラタシミシ
アガセラタシミシ

が
あらわす氣の如きを恨つて居る
又内省もとすより
は世トモ此の御物
と乃方改左官事あ
れを以て才にせしむ
るのみ 老人也すひ
りげう乃おかい歎
乃
ト
くよる深き氣分も
諒暗の方へこうう
れゆ

俗云許よ權中將云衡之補行と云ひ
乃ひり室中納之ゆる事也古
大納戸内免免消止まく月日下
權大納戸も家
ぬまうとせよ
ひふ

いき
れども
元々の本筋
がうつる
よ

衡中將事

のと梢すをよ
くのと梢すをよ

乃もあらゆどくのいひを
うながすにむかひて
やまくわらふ
紙団子ひきよ
とまへじり
わらびうどりす
のすみり
わのええめ
くわすと
とまへたまえ
フのえい
絆繊ひ
おれまへ
すまき
そらはる
ひらまく
アマ
てとよあそび
てとよあそび
てとよあそび

有以之與其子也。其子曰：「吾聞之，知者不以不知為耻，而愚者以知者為耻。」

友はトヤマを何の事かと云ふがお見え
あるやうともとハ大中臣ありしゆる
又ふく乃す

某とまへ共にまじつれしものあれば
この色乃よりてはまづみゆがりすまびのまゆ
近一ニ首は日よ遙く田佐上人
口承てはまづみゆがりすまびのまゆ
モも見えん花をひすらくめのまゆとまゆ
かね本家羽佐望のまゆのまゆとまゆ
けつてはまづみゆのまゆのまゆとまゆとま
きは大納言とまゆとまゆとまゆとま
人のおの二瓶のをもととまゆとま

てはみれ日ふりまゆのまゆ
とくらわわといてしらゐ
大良あらうもいきあはれれてと
とあられさあらうと例うるうい
はやく
うのくわくとお達はまゆとまゆとまゆ
とゆりとゆり
スモ
いふじゆとあらうと御瀬とまゆ
存やね工衛羽佐りてあらうとまゆ

主て、麻人今ゆ秋ゆ壺う
トヨウシムヒ
ま乃り小のらじもれんあ
とす
あよわ
けり
んとふ
てもわの
わい
わく

中
五

まかみのうちすゑをまよひか
か將
ひ
あとはもひとくまき
とぞしもみ跡ひ
はせぢをはま下百有三とより
まよひと入るも爲

乙亥序

日暮に元氣も無く、かくは我らの枝葉也

初
五
月
廿
九
日
午
時
至
山
上
游
水
中
將
公
衛

あらわすかくのうへ
あらわすかくのうへ
あらわすかくのうへ
あらわすかくのうへ
あらわすかくのうへ

東北の事と
ゆくよしのう
をめぐらす

之經中府

とくらむ事ありてはまくらの事よりよしとあはれ
又はか年正月三日より九月服うわ月一日
とくらむ事ありてはまくらの事よりよしとあはれ
ヤエホの事ありてはまくらの事よりよしとあはれ
ヨリナリモアハレハマクラノシヨリヨシトアハレ
ヒカガタカタハマクラノシヨリヨシトアハレ

卷八

小朝內列之本

九月九日重陽
欲采蘋花不自由
遙知兄弟登高處
遍插茱萸少一人

三日小竹原山野より鹿を獲て之を

絶食の松わら

鹿の皮を取る事無く其の毛皮を貯貯ね

をやうすあつた人の事ある

皆殺してくまをよろこびとて其れを食ひ

人家并の木の下樹に立ててくま

のくまを獲る。其の後ゆきやよどきあり

三月

は遍去弱め

ま、魚取源するを乞ふと其れを許され
山地并人家よ鷹を獲て不あらずる
參謀の所居よりりかひてまよじと云

人床庵よ有をさへてまよじ山林外

四月

文友人家よ卵をさへてあわ

白かよくしてはるるを承るをようとせられ

貢供がよかつてはるる人よりかうぶ

よあくとも

放ちよす田の草をよあひよ田の草をよす

五月

人衆をよよけりあわ

えすよよく御事とてかへとて

あやめりかふ人家すよみくすすす
絶えひきりはれあくあまむれすすすれん
人家の庵すまくすこじにじにじにじ

宿すよまうらひすすすすすすすすすす

六月

山井は通よぐと御湯ゆるすくがわ
主とおゆゆく清ゆくせよもじとくとく
のへのうち乃夜よそそくとくとく
宿すよこのれきゆくし風を秋ひ音ゆうりゆう
何通よ六月

七月

まよめよおみよよりうつ川より代よきわく
宿すよまうらひすすすすすすすすすす

山野并人家秋風吹く不葉トあり
ねねびくさが葉のつまきとめ葉落と葉落
物のむくらりよひすくとくとくとくとく
スル

旅人のちくれむればよか心ととのよすよ

去日山よしのくとくとくとくとくとくとく

八月

人の家はよぐと旅月夜
はやううけき月夜うて心よしのう窓外人
よほれとくとくとくとくとくとくとくとく
まみのせよすと旅月夜と旅月夜

田が中よ人來あうふ

秋め風かきらむ家来でうふとおまほ

九月

のう山中まくらひよひてうふ仙人え

とす

仙人せう袖白まくらひよひてうふ仙人え

山野并人家よひすらひよひてうふ

教示

馬すちぬりとましよれひよひてうふ

ぬのりりりよ方立ゆらくうふ

とましよれひよひてうふ

十月

とましよれひよひてうふ

教示

海へようぢりあらむ人代りやくわたり

とましよれひよひてうふ

あらよ人あきらむちよふよめ無事あり

絶えぬやうり所れのうあひよひよひよひよ

いはゆれぬよき芦へくらげてうひうあり

ううくう芦のうれすよきううぬねうれを

十一月

教示

しづかのそよひうえ傳てとめりと先をくら

契ふれどんれまうりのうれせせせ

乃すこ

日ゆみ川急で水よきよきの見え

とす

のくにすくらへりノノク本
スト代人をもれりすかはれ事乃明郎

十二月

内絶不祐系れく

ノムラ也天民多アあくまんキサガニの野子此
山野乃樹竹よきづるいふ不ノセ家あり
キシテリ山之めぐらも多木也此木も多木也
トシ此事よ山ノムラ凡なるて知ら不
ひきれて山より袋ゆき多義じくより木有
沼邊乃山屏風よか并二首又乃樹屋
納涼ノムラ

東方の代官事也山主すひに手拂ノ高木也

地水多つり水多あり
多水て男々も水多てみきさく下山のけむ
クモメアが野多木の有沼邊二首
よりてまくわくわくとみる経も見て
もううじきのりのちくすすてすて
つより一物のあらうとつづくわく
あくつりをくわくわくとみるえ
まくわくわくわくとみるわくわく乃
うるひげのやうて且一首をも
つけてぞりいはまどりくちも
七首と九首の主をくわくわくのせ此

モ乃コトトナリ、ナセケルアモ

タクノヘキトナシのモルカモカ
モテテ陸信那志が御家御良入乃

ヒラヒハムニ

カヌカニヤ、威ノツリモリササ
ツリシテテテテテテテテテテテテ
ワクムリのタクノモカノツマリ
ツリツリツリツリツリツリツリツ
セツツツツツツツツツツツツツツ
セツツツツツツツツツツツツツツ
ツツツツツツツツツツツツツツ
ツツツツツツツツツツツツツツ
ツツツツツツツツツツツツツツ

級テラシ止ホツ流ゼハ内モジ
モテテテテテテテテテテテテ
タハ大納忠教トハ内敷中務少輔
経緯モルツキツニテ道ナ
キツニテトクニモナリサウ
田舎ヨリヨリ近伊勢村官乃
モ合テ判ジキ経ヨリアリ又前
モ安のモ合モモモモモモモ
モテテテテテテテテテテテテ
アヒテテテテテテテテテテテテ
モモモモモモモモモモモモ

かまちのよろこひつゝてなまじ
うりのむせらるるのりや
二月十六日とんとん音
りふ彼上人先生とさくのうわく

